

## 小学校での発音指導と文字活用の可能性

丹羽 都美  
岐阜聖徳学園大学外国語学部

### The possibilities of utilizing pronunciation guidance and characters in elementary education

Satomi NIWA

#### Abstract

This paper discusses some important aspects concerning pronunciation which are well-known but not practically introduced to English education in Japanese elementary school. This paper suggests that it is crucial to adopt physical activities for learning the differences in speech patterns so students develop necessary muscles for producing English sounds, along with traditional pronunciation practice. It is also suggested that these practices should be incorporated within a particular period so pupils can acquire the phonological characteristics of English. By utilizing the knowledge of what phonological differences exist between English and Japanese and employing the knowledge of the Roman alphabet, which elementary students learn when they start English activities at school, English pronunciation practice in elementary school can be improved.

Key Words : phonological differences, physical activities, learning speech patterns, Roman alphabet

#### I. はじめに

言語習得のための基礎訓練には、発音練習、文法の習得、聞き取り練習、文字の習得・練習などがあり、これらを経て、さらに自分の意見などを書く・発言する練習、意見や情報を交換する会話に発展していく。早期英語教育は外国語に慣れ親しむところから始まるのではあるが、それも英語の基礎を積み上げていく最初の段階である。

基礎訓練はスポーツでも音楽でも、練習をしている段階では実際の試合や演奏と異なり地道で面白みのないものにとらえられがちであるが、基礎をしっかりとしておかななくては上達もすばらしいパフォーマンスも望めない。言語の習得も同じように場合によってつまらなく感じるかもしれないが基礎訓練が大切である。早期英語教育においては、慣れ親しむ間にこの基礎訓練を楽しく盛り込んでいくこと、または知的好奇心を刺激して学習者が進んで望みたいと思う活動にすることが好ましい。

早期英語教育を実施する意義、また早期英語教育をうける学習者の発達段階の特徴の重要な点のひとつは、外国語の音を正しく聞き分け、正確に発音できることであり、この特徴を生かした英語教育実践が望まれる。そこで本論文では、英語の発話において基礎練習に当たる早期英語教育時の発音練習について焦点をあて、これまでに言われてきたことに加えて、どのようなことに配慮して指導者が教材を提示していくことが大切であるかを文字指導の可能性とあわせて提示していく。

序論にあたる本章に続いて第2章では、国立教育政策研究所のプロジェクト研究「小学校英語教育に関する調査研究」<sup>1)</sup>アンケートの結果をもとにどのような内容を学習者は求めているかということから文字指導の可能性について考察する。次に第3章で、よく知られている英語と日本語の音声学的な違いに加えてどのような点が留意されるべきかを考察し、これを通して、二つの言語の言語音構成のどこに留意して指導するのが効果的であるかを場合に応じて文字を活用した方法の可能性とともに考察する。第4章が本論の結語となる。

## Ⅱ. 「小学校英語教育に関する調査研究」に見られる小学校英語教育の様子

平成27年から28年にかけて実施された国立教育政策研究所のプロジェクト研究「小学校英語教育に関する調査研究」によれば、小学校での英語教育については、10%近くの児童が英語に対する苦手意識を持っているものの、指導者からみた外国語活動導入後の児童の変容の様子に対する複数の問いに対して70%前後が、文部科学省が外国語活動の目標とした「言語や文化についての体験的理解」「外国語への慣れ親しみ」「コミュニケーションへの積極性」のうち、「外国語への慣れ親しみ」に関して、「慣れ親しんだ」という回答になっている。この報告ではこの結果について、ひとつにはこの目標が一番可視的であるからだという分析をしている。そうであったとしても、慣れ親しむという目標は現行の外国語活動である程度達成できていると考えられる。

また、同調査の中学1年生を対象にしたものでは、この指導者から見た生徒の変容が「外国語への慣れ親しみ」「コミュニケーションへの積極性」についてより成果が上がっていると分析している。これは、小学校での外国語活動での外国語への慣れ親しみができており、その成果としての外国語を使ったコミュニケーションへの自信が積極性へとつながっていると考えられる。

その一方で、同調査は中学1年生に「小学校の英語の授業でもっと学習しておきたかったですか」という質問をしている。これに対しては、表1のような回答結果があったと報告されている。

表1 小学校の英語の授業でもっと学習しておきたかったですか

回答項目	%
英単語を書くこと	83.7
英語の文を書くこと	80.9
英単語を読むこと	80.1
英語の文を読むこと	79.8
英語の発音を練習をすること	74.6
英語で簡単な会話をすること	72.6
英語で自分のことや意見を言うこと	69.3
友達や先生などが英語で話しているのを聞くこと	64.6
みんなの前で英語で発表すること	62.9
日本語と英語の違いを知ること	56.7

国立教育政策研究所のプロジェクト研究 (2017:02)

このデータからわかることは、児童としては、小学校での外国語活動において歌やお遊びだけでなく、読み・書き、自分なりの意見交換や発表を行いたいと感じており、第一言語と第二言語の差異を知りたいという知的な探究心があることである。

また、中学1年生に対する「小学校の英語の授業で学んだことで中学校の授業で役に立ったこと」という問いには、表2にあるような回答結果が示されている。

表2 小学校の英語の授業で学んだことで中学校の授業で役に立ったこと

回答項目	%
アルファベットを読むこと	88.8
アルファベットを書くこと	83.9
英語で簡単な会話をすること	82.8
英語の発音を練習すること	75.8
友達や先生などが英語で話しているのを聞くこと	73.2
英単語を読むこと	72.9
日本語と英語の違いを知ること	70.2

国立教育政策研究所のプロジェクト研究 (2017:02)

この二つの問いに対する回答結果から、報告書では「音声中心で学んだことが中学校でうまく生かされていないという小中連携が課題である」と分析している。

これらのデータをもう少し詳しく見てみると、まず、文字に関する回答からは、実際は小学校でアルファベットを読む・書く活動が行われているところがあること、もしくは小学校中学年において国語で履修するローマ字が役に立っていることが読み取れ、英語を読む・書く準備は小学校中学年以降において十分にできているが、表1の結果からすれば、実際には小学校で読む・書くが行われていないか十分でないことに学習者自身中学校に進学してから不足だったと感じていることがわかる。

次に、発話・聞き取りに関する回答を見てみると、発話・意見発表・発音練習・聞き取りなどすべて活動は中学進学後役に立っているが、やはり十分ではなかったと感じていることがわかる。これは日本語と英語の違いを知ることについても同様である。

もちろん平成32年度から小学校での英語が教科となり、外国語活動が中学年で必修となることでこれらの不足分を補った活動が今後小学校で十分に行えると考えられる。実際、文部科学省が提示・解説している小学校での新しい英語教育における補助教材には、中学年ではHi, friends! Story Booksを通した読み聞かせから「聞く」「話す」能力の養成を高めること、高学年では同様にHi, friends! Plusを通して文字に対する認識・文構造の違い・音声の違いと特徴を学ぶよう方向づけている。<sup>2)3)</sup>

この読み聞かせの教材であるStory Booksには絵本の中に単語が記載されており、外国語活動の諸場面で児童は英語の表記に実際は慣れ親しむことになる。さらには、児童が文字を使って英語学習したい・したほうがよかったという現況がある。そして、久埜(2006)<sup>4)</sup>には児童が興味を持って辞書を使う姿の紹介などがされており、児童が辞書を使用する効果や可能性が述べられている。この記事の掲載された2006年の時点では日臺(2006)<sup>5)</sup>では中学1年生の3学期から中学2年生の1学期が多方面に辞書を活用する最適期間としているが、2020年度以降の小学校での英語の教科化を考えれば、学習内容から考えても小学校高学年に該当する時期とも考えられる。

このように見てみると、小学校での文字を活用した指導の可能性が十分にあり、現代英語の綴りと発音は必ずしも合致しないこともあるが、もともと表音文字であるローマ字を英語に導入した古英語の時代から現代への変化によるもので、発音と綴りにはある程度の規則性もあり、文字を利用した発音指導も可能となる。実際、宮(2007)の『小学生のフォニックス』シリーズ<sup>6)</sup>や今井(2007)<sup>7)</sup>など児童向けのフォニックスの教材も多数出版されており、文字と音の関係を利用した発音の指導及び文字を覚える指導は楽しみながら早期英語教育において十分に行うことができる。そこで、今回は発音の習得には最適ともいえる段階の早期英語教育の発音指導に焦点を当てて、教員養成の場面・現職教員の英語教育に関する研修等において、これまで知識としては知られていても実践的に活用されていなかった可能性の高い事柄を効果的に導入することを示唆していきたい。

### Ⅲ. 音声学的な側面から見た日本語と英語の違いを理解した指導

早期英語教育を導入することによる英語学習の利点の一つは音声面である。実際、早期英語教育における言語の4技能の中、音声面に注目すると、塩澤他(2004)<sup>8)</sup>で「国際理解教育に通じる英語教育」の積極的な評価としてまとめられている中に、1)情意フィルターが低いため、気楽に授業に取り組める、2)正確さより流暢さを重視するので、生き生きとしたコミュニケーション活動ができる、3)英語の音声声を正しく聞き分け、発音ができる、といった学習者の特徴があげられている。

このような、早期英語教育における音声面の習得については、ほかにも中本(2003)<sup>9)</sup>で、学習者の特徴として、幼児から小学校低学年は、聞いた音をそのまま再生(発音)することができ、英語特有のリズム・イントネーションを自然に身につけることができる時期、小学校中学年は、聞いた音をそのまま発音するのは難しくなるが、リズム・発音・イントネーションを無理なく身につけられる時期、小学校高学年から中学校では不要な母音挿入の傾向があり、日本語にない音を日本語の近い音で代用する時期としている。

また、白井(2008)<sup>10)</sup>は「第二言語習得における音声面は母語の干渉が非常に強い領域だと考えられています」と述べており、自然に習得できる期間に適切な指導を行うことが重要となる。その際、竹内

(2012:15)<sup>11)</sup>では、「発音はスポーツやピアノと同じで、いくら小さい頃から始めたとしても、すぐれたメソッドと訓練がなくてはうまくなりません。」と主張している。

大学において、教員志望の学生も、英語学等の音声学の講義などで、日本語の高低の音域と英語の高低の音域に違いがあること、アクセントのつけ方の違いがあることから始めて英語の音声について一応は学ぶ。しかしながら、実態としては、教員免許取得の単位のために履修するが、これらの知識が実践的に活用されているかという点には疑問が残るのが現状である。そこで、日本語話者にとってどのような音の発音が難しいかなどはすでによく知られているが、どのような点にさらに気をつけたいか、まだ十分でない部分をあげながら指導の可能性を示唆していきたい。

## 1. 英語の息

まず第一に、英語と日本語では息の使い方から異なることにあまり注意がされていない。英語の音は日本語より強い呼気を伴って発音される。見解の一つとしては、竹内(2012:16)では、「英語のネイティブスピーカーは無意識のうちに、一つの単語ですら途中で息つぎして正しい音を出しています。その間(ま)が英語のリズムとイントネーションを作って」おり、日本語の場合は英語ほど強い呼気を必要としないため、「その要領で英語を話すと、子音も母音もネイティブに比べてずっと弱く、彼らには英語の音として把握できません。」という指摘がある。さらには、英語の声は日本語と比較すると低く太く強いとしている。

このような英語らしい音を出すために、竹内(2012:17)は、強い呼気を繰り返し出すことができるよう横隔膜を押し上げるインナーマッスルを鍛え、低く響く太い声のために声帯を下げる筋肉を鍛えることの大切さを解説し、横隔膜から口までの鍛え方を解説している。松本(2012:17)<sup>12)</sup>も発音に用いる体の部位の違いを示して息の吐き出し方を、鶴田(2004)<sup>13)</sup>は全編を通して、小林(2006)<sup>14)</sup>も口の形やあごの動きなどが異なることから英語のための「顔」を作る訓練の重要性をそれぞれに指導している。<sup>15)</sup>

英語と比べて子音・母音の数が少ない日本語母語話者としては、口と舌の柔軟性を高める必要性もある。せつかく早期に英語教育を実施するのであれば、この時期から英語用のインナーマッスルを鍛え始めれば効果的であるし、これを英語授業の楽しいウォーミングアップに、または、毎日の朝の会等の活動や、他教科との連携性をもった教育内容として英語とは限らず、音楽の活動の一部に取り入れることも可能であろう。また、これらを参考に、全国的に行うことのできる発音のためのより有効な基礎作り体操等を考案することも考えられる。

## 2. リズムとイントネーション

つぎに、リズムとイントネーションに関する日本語話者の英語発話の特徴についても、外国語活動とはいえ指導の際に暗示的にでも留意すべき点をあげる。

一つはアクセントの付け方が英語と日本語とは異なることから生じる事象である。日本語はピッチアクセント言語であるが、松本(2012:56)で指摘されているように、日本語自体がイントネーションをあまりつけないが、一方の英語は音階の高低差が大きく抑揚にとんでいる。そのためこれが日本語話者の音域からは大きくはみ出して発音されるため、英語の音を言語音と認識しない場合が日本語母語話者にはある。これも、息の使い方の違いと同様に自然に習得できる時期に具体例を提示して常に意識させたい。

これに関係して、リズムを作り上げる要素の一つが音節であるが、日本語と英語では、言語音の成り立ちから音節の現れ方に大きな違いがある。

大まかな表現をすると、1音節は母音(vowel=V)一つを中心としてその前、後、またはその前後を取り囲むように子音(Consonant=C)が現れているものである。日本語の音はア行と「ん」を除けば、基本的に「子音+母音(CV)」で成り立っており、ひらがな1文字が1音節になる。

一方で、英語の場合は、1音節の場合、V(例“a”)、CV(例“to”)、VC(例“an”)など日本語の音節に近い構造のものは機能語を除くと相対的に数が少なく、また、日本語と違って子音で終わる語が多い。英語の一音節の語の基本的な構造はCVCであるが、CVCの他にさらにCCVC、CCCVC、CVCC、CVCCC、CVCCCCといった組み合わせが可能である。それぞれ順に例を挙げれば、top, stop, splash, pact, first, rumblesなどである。

このように、日本語と比べて英語の場合は子音連続が語頭・語末ともに非常に多く、これが英語と日



本語のリズムの違いにも影響してくる。日本語はCVの連続で語を構成するため、CVCV・・・と音節がほぼ等しい間隔で現れる。日本語は強弱の差でアクセントをつける言語ではないため、等間隔に現れる音節がほぼ等しい強さで現れると考えてよい。これが日本語のリズム、音節拍リズムである。従って、若干の強弱はあるものの、一文字一文字が等しい長さで発音されるため、語（文字）が増えれば増えただけ発話にかかる時間は長くなる。

一方、英語の場合は、先に述べたようにアクセントは強弱でつけられるが、このアクセントが置かれる要素は母音であるため、弱い音節と強い音節が生じることになる。また、先に見た単語の構成からもわかるように、1音節中の子音の現れ方と数が多彩であるため、1音節の長さが日本語のように等質ではない。このため、日本語のように等しい長さで繰り返される拍を刻むことはおこらない。英語のリズムは強勢のある音節が等間隔に現れそれ以外の部分は短く速く弱く発音される強勢拍リズムとなっている。従って、文を構成する単語についても強く発音される単語とそうでない単語が生じることになる。文を構成する上で、単語は大きく分類すると、意味内容に重要性がある内容語と、より文法的な機能に重要性がある機能語に分かれるが、基本的には内容語に文強勢が置かれ、機能語は弱く読まれる<sup>16)</sup>。英語のリズムを実際の文を使って示すと(1)のようになる。ここでは文強勢のある部分を●、弱い部分を○で示している。

- (1)a. People enjoy flowers.  
 ● ○ ● ●
- b. People may enjoy flowers.  
 ● ○ ○ ● ●
- c. People may enjoy the flowers.  
 ● ○ ○ ● ○ ●
- d. People may have enjoyed the flowers.  
 ● ○ ○ ○ ● ○ ●

このように 拍、すなわちアクセントのある部分が等間隔に現れる、従って弱く発音される部分は時間が短く明瞭には発音されない。例えば(1)の文は(1a)から順に単語数が増えていくが、(1)のどの文もほぼ同じ長さ（時間）で発話が完了することになる。これは、等拍で強弱の差がなく音節が現れるため現れる音節の数だけ発話時間が長くなる日本語のリズムとは大きく異なる。

口頭のコミュニケーションにおいては、聴者は常に聞き取った音をもとに、自分の知っている語彙と照らし合わせながら推測し、その先の内容の予測をしながら理解していく。従って、コミュニケーションに用いている言語の音を正確に発音することも大切であるが、その言語のリズムで発話されないとその言語の母語話者にとっては予測・推測をすることが難しくなる。このリズムの練習も、早期英語教育においては、手や机をたたきながらリズムをとる遊びの要素を加えながら、例えば(1a)から(1d)の文を等しい拍の中に入れて発話することで教えていくことができる。他教科との連携としては、英語の歌を拍子を取りながら行うなどの音楽の授業でも取り入れ可能である。より理論的な説明が可能な学習者にとっては、学習者の傾向にあわせて法則をわかりやすく提示しながら同様な練習を繰り返すこともできる。

もう一つは、イントネーションパターンに関することである。英語の特別な条件がない場合の平叙文には次のような基本的なイントネーションパターンがある。

- (2)
- 2 My daughter wants to live in <sup>3</sup>Eng4land.

英語のイントネーションの相対的な高低は、基本的に4つのレベル1) 低、2) 中 3) 高 4) 超高に分けられ、特に通常の伝達以外に異なる意図がない平叙文の場合、(2)に示すような高低のイントネーションパターンを持っている。中郷・中郷 (2001:13)<sup>17)</sup>は日本語母語話者が(3)のような発話をするこ

が多いと指摘している。

(3)a. My name is Peter.

b. I live in London.

(中郷・中郷(2001:13))

(2)について「特に通常の伝達以外に異なる意図がない平叙文の場合」とことわったように、通常のイントネーションパターン以外で発話するということは、通常とは変えてわざわざ高くした部分に焦点がある、と誤って伝えることになる。これを避けるためYes/No疑問文などの場合と同様に通常の平叙文のイントネーションについても無意識のうちに発話できるよう早期に正しいパターンを自然と習得できる指導が必要となる。これも小学校であれば正しいモデルを示しさえすれば説明など与えなくても正しく身につけていくことができる。中学生以上では解説を与えて学習者が意識するよう心がけることが可能であろう。また、外国語活動や小学校の教科の活動の中で、有名人のスピーチや話し方を楽しんでまねることを通して、英語のリズムやイントネーションパターンを無意識的に身につけるとともに、レベルに合わせた内容でレシテーションコンテストのような発話の英語らしさを競う機会を設けることもできるであろう。

### 3. 音節への母音挿入がおこす問題点

音節構造に関連してもう一つ日本語母語話者が注意すべき事柄がある。上述したように、日本語の音節はほとんどが母音で終わり、子音で終わるものは少ない。従って日本語話者は無意識のうちに子音の後に母音を続けて発音する傾向にある。これが、日本語母語話者が英語を話す際の問題点となる不要な箇所への母音挿入である。母音を挿入する癖についてはよく知られているが、その結果が、発音の不正確さが生み出す誤解だけでなく、聞き手の理解度に影響を与えコミュニケーション上の問題点になることについてはあまり理解されていない。

先述のように、日本語は基本的に「子音+母音(CV)」で成り立っており、英語を話す際に、日本語話者は子音のみの音節の発音に無意識のうちに母音を挿入してしまう。例えば、dreamという単語は[dri:m]、すなわちCCVCと子音連続があるが、日本語話者は「ドリーム」([dori:mu])とCVCVCVと子音の間に母音を挿入してしまう傾向がある。会話において、聞き手は常に話し手が次に何を言うのかを想像しながら耳を傾ける。聞き手は知っている語彙の中から聞いた音が何であるかを推測しながら聴解する作業を行う。静(2014)<sup>18)</sup>の表現を借りれば、「英語ネイティブは英単語の音節数に期待値を持っている」ため、日本語話者が犯しがちな母音の挿入をしてしまうと、こちらが伝えたいと思っている単語よりも音節数を増やすことになってしまい、英語母語話者は異なる音節数の単語の中から話し手が言っているであろう語をさがすことになるため、伝わらない、あるいは理解に時間がかかる事態が生じることになってしまう。

この母音挿入については、理論的に理解できる学習者には、子音の後に無意識に母音を挿入することの問題点を、母語の近似例と照らし合わせながら説明することも効果があるであろう。早期英語学習においては、誤って母音を挿入した場合と正確な場合との違いを聞き分ける遊びを補助として加えることもできるが、音まねが上手な学習時期であれば、正確な発音モデルの提示が行われていれば早期に正確な発音の獲得が確実に達成できる。また、日本語をローマ字表記する練習などの際に、英語の単語も提示する、もしくは書かせるなどして、先に述べた母音と子音の現れ方の違いなども意識を向けさせることが可能である。

### 4. 意識している文字表記との差異

母語に存在しない音を近似の母語の音で代用することはよく知られており、この点に注意を要することは十分に指導されてはいるだろう。いわゆる日本語の母音「あ」と/æ/・/ʌ/・/ɑ/や子音の/θ/・/ð/と/s/・/z/、/h/・/Φ/と/f/・/v/などは代表的な例である。しかしながら、実際まだ十分に理解されていないものもある。それはカタカナやローマ字で理解しているものと実際の音とのずれから生じる事象である。

ローマ字表記を利用すればその違いが理解しやすい場合もある。ローマ字表記をすると、日本語の「シ」はsa shi su se so となり、他のサ行の音と異なることが明確になる。このように言及することで、他のサ行とは異なり、「シ」は/ʃ/で発音することになることがより理解しやすくなるだろう。英

語の *ship/sip* をどちらも「シップ」と発音したり *she/see* をどちらも「シー」と発音するのが日本語母語話者の多くに見られるが、綴りの *sh* は /ʃ/ で、*s* は /s/ で発音することについてもローマ字表記の違いを利用して注意喚起でき、正確な発音を繰り返し練習して習得することができるであろう。

一方で、ローマ字表記ではうまく理解できない、もしくは誤解してしまうものもある。一つの例は *rose* の /z/ と *roads* の /dz/, *casual* の /ʒ/ と *judge* の /dʒ/ で、それぞれどちらも「ズ」「ジュ」とカタカナで書く。そして、日本語母語話者にはそれぞれが同じ音に聞こえる可能性が高いと言われる音である。

これらに対応する無声音の組 /s/ と /ts/, /ʃ/ と /tʃ/ は日本語母語話者にも区別ができる。このことを利用してこれらの音についても指導できる。/z/ と /dz/ を例に挙げれば、無声音 /s/ に続いて有声音 /z/ を発音する時には口周りの調音法自体は変化していない。その感覚を利用して無声音 /ts/ の次にその発音の仕方そのまま対応する有声音 /dz/ を発音するという練習、または、文字が利用できる学習者であれば、/dz/ /dʒ/ は文字通り /z/ /ʒ/ の前に /d/ を入れるつもりで発音する、という方法が /z/ と /dz/, /ʒ/ と /dʒ/ の区別、聴解への一つであろう。

前述の日本語の「ズ」が属する「ザ」行はローマ字で書くと *za ji zu ze zo* となるが、実際は、今井他(2007:89)に示されているように、単独または語頭に来る場合は、/dza//dʒi//dzu//dze//dzo/ である。<sup>19)</sup> また、中郷・中郷(2001:39)では、日本語の「ジジイ」という語の発音は [dʒiʒi:] であるが通常日本語話者はこの最初の2音が同じ音だと認識していると示されている。このように、ローマ字表記が必ずしも助けにならない場合も指導者は理解しておかなければならない。

ここでみた例からも、日本語の音を理解しその上で英語の音を指導するような教員養成の段階での学習・教員研修が必要であることがよくわかる。今回は音声の側面から見ているが、音声の側面だけでなく文法理解にも、言語文化的なコミュニケーションの方策の差など学習者の大半が日本語母語話者であることから、日本語の知識を利用し、また日本語と比較することが英語の理解を深め、同時に教科としての国語の新たな知識ともなる。このことから言語学としての日本語学も英語を教える教員養成の課程には必須とすることも検討することが必要であろう。

#### IV. おわりに

いったん教室を出れば英語を使う機会がほとんどないことが多い日本では、自主学习以外は授業こそが正確な発音獲得の唯一の場といえる。その中で、のびのびと英語を使う心的態度を養うためには誤りの指摘・指導はあまり頻繁に明示的には実施するのは避けたい。自然に言語音を習得できる時期に基本となる事項を体得できれば、そのような指導を大幅に減らすことができる。その中で英語の総合的な響きと同時に一つ一つの音素の発音の練習も大切な基礎練習も、学ぶ楽しさが損なわれない方法で実施していきたい。

そのためには、まず英語の音を出すための体内・口周辺の筋肉作りを早期英語教育の段階で継続的・反復的にウォーミングアップをかねて行い、全体的なリズム・イントネーションを掴む練習として、ALT・日本人教師の少し誇張したぐらいのモデルをまねる、身体でリズム・イントネーションを身につけてしまう遊びの要素を持った活動を組み入れるなどが大切となる。

英語は強勢の位置が意味を変えるため、語彙学習の際に強勢の位置も正確に習得する必要がある。あえて教員がTTなどを通して悪い例を演じることで学習者に気づかせ意識させ、誤りや誤り指導を減らすことができる。句・文などの基本的な強勢の現れ方や意図によっての対比強勢もTTのスキットを通した例示、それを模したペアワークなどで楽しみながら習得できる活動になる。

これらの指導に、有機的な教育の一環として国語で学習するローマ字の知識を英語の発音の指導にも利用することで、英語の発音の正確さも国語としてのローマ字の練習も可能となる。また、「小学校英語教育に関する調査研究」で見られた児童の文字練習に対する不足感への対策ともなる。

時に、明示的に誤り指摘も必要となる。目立つ間違いがあったときには、確認する意味で教師が誤りのあった表現を正しい発音でオウム返しに発話したり、その言語にない音を代用した発音を教師が示して、次に正しい発音を示し、特に要点となる箇所を練習させるという活動、また、伝言ゲームのような発音リレーでお互いの発音を確認しながら進めるゲームや双六の止まった箇所でも語彙や発音練習を取り

入れた活動など早期に遊びを通して音声面の基礎を固めることが自信と発展に結びつく。

この自信があれば中学校以上では、コミュニケーション練習・実践時の情意的な抵抗が少なくなり、細かい発音指導の必要は減少し、さらに内容のあるコミュニケーション学習・実践につなげられる。早期英語教育が実施されているからこそ、英語の音を生む体作りから始めて、話す・聞くに加えて、文字を利用した発音指導の部分でも、読む・書くの技能を取り入れたバランスのよい内容で、自然に正確な英語らしいリズム・音調で発話できる指導が可能である。

## 注・文献

- 1) 国立教育政策研究所 (2017): 「小学校英語教育に関する調査研究」  
[https://www.nier.go.jp/05\\_kenkyu\\_seika/pdf\\_seika/h28a/syocyu-4-1\\_a.pdf](https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h28a/syocyu-4-1_a.pdf)  
(最終アクセス日: 2018年9月13日)
- 2) 文部科学省小学校の新たな外国語教育における補助教材 (Hi, friends! Plus) の作成について (第5・6学年用) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/1355637.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1355637.htm) (最終アクセス日: 2018年9月13日)
- 3) 文部科学省小学校の新たな外国語教育における補助教材 (Hi, friends! Story Books) の作成について (第3・4学年用) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/1370103.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1370103.htm) (最終アクセス日: 2018年9月13日)
- 4) 久埜百合 (2006): 「辞書の活用 子どもと英語辞書 -自分の力で使えるようにするために-」  
Sanseido English 英語教育リレーコラム  
[https://tb.sanseido-publ.co.jp/english/column/relay\\_bc/20060106.html](https://tb.sanseido-publ.co.jp/english/column/relay_bc/20060106.html)  
(最終アクセス日: 2018年9月13日)
- 5) 日臺滋之 (2006): 「辞書の活用 -中学校でのDictionary Workへの提言-」  
Sanseido English 英語教育リレーコラム  
[https://tb.sanseido-publ.co.jp/english/column/relay\\_bc/20060206.html](https://tb.sanseido-publ.co.jp/english/column/relay_bc/20060206.html)  
(最終アクセス日: 2018年9月13日)
- 6) 宮清子 (2007): 「小学生のフォニックス1-4」, 株式会社mpi松香フォニックス, 東京.
- 7) ジュミック今井 (2007): 「えいご大好き! ママとキッズの初めてのフォニックス」, 株式会社すばる舎, 東京.
- 8) 塩澤利雄・伊部哲・園城寺信一・小泉仁 (2004): 「新英語科教育の展開 (新訂版)」, 英潮社, 東京, 9-10.
- 9) 中本幹子 (2003): 「実践家からの児童英語教育法・解説編」, アプリコット, 東京, 14-16.
- 10) 白井泰弘 (2008): 「外国語学習の科学」, 岩波書店, 東京, 20.
- 11) 竹内真生子 (2012): 「日本人のための英語発音完全教本」, アスク出版, 東京.
- 12) 松本真一 (2012): 「ゼロからスタート英会話の音感スイッチON♪」, Jリサーチ出版, 東京.
- 13) 鶴田豊 (2004): 「英語のリスニングは発音力で決まる!」, ジャパンタイムズ, 東京.
- 14) 小林美代子 (2006): 「聞ける! 話せる! 英語力3カ月トレーニング」, 研究社, 東京, 12-17.
- 15) 指導法の詳細については竹内 (2012)、鶴田 (2004)、小林 (2006)、松本 (2012) などを参照されたい。
- 16) 話題の焦点、文の構造などで機能語に強勢が置かれる場合も多くあり、これはあくまでも基本的な場合であり絶対的な規則ではない。
- 17) 中郷安浩・中郷慶 (2001): 「こうすれば英語が聞ける」, 英宝社, 東京.
- 18) 静哲人 (2014): 「発音いいね♥」と言われたい!, *English Journal* 6月号, 18-35.
- 19) 今井邦彦・外池滋生・Joseph T. McKim (2007): 「英語 徹底口練!」, 実務教育出版, 東京.